

## こわがれない子を考える

幼児教育学科 山田 真理子

子ども達と一緒に児童劇を見に行った時のことでした。舞台の上では、主人公の王様が大切な人形をこっそり隠して、大臣たちを驚かそうと袋に入れて持ち出しかけたところを大臣に見つかってしまった場面です。見破られてしまうか、うまく隠せるか、ハラハラドキドキするところのはずなのに、その時、何人もの子どもたちが、「人形隠してる!」「袋の中に人形が入ってる!」と叫びはじめたのです。その子どもたちの叫び声は劇を妨害し、舞台の人たちを困らせ、異様でした。私には劇そのものよりも、この子どもたちの姿の方がはるかに心に残り、いろいろなことを考える材料になりました。

### I. お話に浸りきれない子どもたち

まず、このような態度が生じる背景には、日々の子育て、保育の中で子どもたちが、「じーっと黙ってお話を聴き、心の中でその話をイメージとして楽しみ味わうという態度を身につけることができずに育ってきている」ということがあります。それは、一つには、多くの幼稚園・保育園で、お話や絵本、紙芝居を読み放しにしていけないことによる弊害です。「本当に子どもの心を育てようと思うなら、お話をたくさんしてあげてください。絵本をたくさん読んであげてください。でもそのあと質問をしないでください。読み放しにしてください。」という正しい指導を受けている園はほんのわずかです。「読後質問をし、子どもがお話を正しく理解できているかどうか確認しなさい」などという間違っただ指導を受け、絵本を読んだあと「何が出てきた? 何のお話だった? ○○って言ったのは誰?」というような質問をするのがあたりまえ、いや、むしろしなければいけないとすら思っている保育者や親に育てられた子どもは、お話をまるごと心で受けとめて、その情感にほっこりとひたりきることなんてできるはずがないのです。子ど

もたちは、あとで質問されるようなお話の断片を覚えることばかりに必死になり、感動を失ってしまいます。そしてそんな保母さんが好きな（よくする）話といえば「脅し」です。歯みがきしないで寝たので夜中に歯が痛くなった話や、手を洗わないでおやつを食べたので、おなかが痛くなった子の話、好き嫌いばかりしていたのでお相撲にちっとも勝てなかった動物の話や、きちんと片づけなかったのでおもちゃがなくなってしまった話などの“脅し話”がお得意です。夢のような、豊かな、のびのびとした話はあまりしないばかりか、そういう話では、教育効果（子どもが委縮して、保母の言う通りに動くことをこう呼ぶ人がいます）がないと言うのです。こんな脅し話ばかりされては、お話を聴くことすら、嫌なこと、楽しくないことになって、幼児期にすでに、人の話を聴く耳をもたない子になってしまいます。そんな子は主人公と一緒にハラハラドキドキしながら次はどうなるのだろうと身をすくめて待つなんてことはしません。ちょっとでも先を知っていれば、「ボク知っとる！こうなるっちゃ！」と叫び出す。そんな子が育てられて（つくられて）いるのです。

ただジーンと黙って座って見ることが良いというわけではありません。ある園での演劇観賞の時、先生がピーッと笛を鳴らし、「おくちは!？」と言うと、子どもたちが一斉に「チャック!」とひと言、シーンとなったことがありました。そしてその子どもたちは舞台上に主人公たちが登場しても「拍手は?」と言われるまで手をたたこうとしないし、面白いのかつまらないのか分かりませんが、笑いもせず、かといって席を立つでもなく、ジーンと最後までお行儀よく座っていたのです。こわい先生の元でこんな風にしつけられている子どもほど、そこから放たれると、劇を乱すのも平気で叫ぶような子になるようです。なぜなら、この子たちは、劇にとけこむことができず、主人公たちと一体になって様々な体験を心の中で共感するということできていない点で、全く同じだからです。

## Ⅱ. 叫ぶ子はのうてるのか?

劇にとけこみ、一体となっていたら、先の人形を隠す場面では、ハラハラドキドキして、ジーンと座っていられず、椅子からすべりおち、前の席の背もたれにしがみつくようにして身をのり出して舞台を見つめるかもしれません。また叫ぶにしても、別のある劇で、親の仇の虎を捜しに来た猟師

が大虎に喰われてしまった瞬間、顔をまっ赤にして「バカアー！」と怒鳴った子の心は、劇の中に生き生きと生きていたに違いありません。しかし、舞台のそばまで走ってゆき、「人形隠してる！」と叫ぶ子や、「ほんとは中に人が入って動かしてるんだ！」と言う子は、劇にとけこんでいるとか、積極的とか、のってる（このことばの誤解が一つのキイになりそうですが）とかいうのとは全く異質なもののなのです。では、何が違うのでしょうか。

何を考えるにも「心」という基盤で考えてみるとすぐ分ります。「のってる」というのは、心が熱くなり、登場人物と同一化して、我がことのように思えてしまい、終ったあとも、心に暖かい豊かなものが生き生きと残ることを言います。(狛師が虎に喰われた瞬間、「バカアー！」と怒鳴った子どもの心です)。でも、あの王さまが人形を隠そうとしている時に「袋には人形が入ってる！人形隠してる！」と叫ぶ子どもたちの心は、王さまとも、あるいは他のどの登場人物とも一体になってはいないのです。舞台のあとの交歓会でも、「王さまのヒゲとって見せて」「冠はボール紙なんでしょ」といった発言が目立ちました。このような「ネタをバラす」発言のあとに残るものは、暖かい豊かな生き生きしたものではなく、冷えきった、寒々とした、色あせたシラケではないでしょうか。あの子たちはのってるのではないのです。劇にとけこめず、夢をもてず、ちょっとした間違いや思い違いも許せない子であるということなのです。(相手のあげ足をとる、まちがいを指摘することに長けていると見えることもあります)。

### Ⅲ. こわがれない子どもたち

これは、不安をすぐさま消し去ってしまいたがることと深くつながっています。例えば、お化けや怪獣などの出てくるテレビを好んで見るくせに、「これ作りもの、これここから人が入ってるのよ、これニセモノよ」とそのこわさを否定しつつけるような子を多く見かけます。それを、「今の子は科学的だから…」と見る親もいますが、このような子は科学的でも何でもないのです。夢をもてない、信じる力がない、心にうかんだ不安をいつも否定しつつけないと落ちつかないということです。この子たちはこわがらないのではなく、これがれないのです。例えば、子どもたちがリスやウサギになってかくれんぼやうたをうたって遊んでいるといった保育を考えてみましょう。そこに、乱暴者のライオンが「ウォー！」と大声をあげな

がら突然現われたとします。キャーッと悲鳴をあげて椅子や机のかげにかくれる子ども、そしてそのかげから、「あっちいけ！バカ！」と悪態をつく子どもたちの中で、「ウワッー！」と泣き出して先生にしがみつき、ライオンの方を全く見ようとせずに泣きつづける子どもがいます。また一方で「この中〇〇先生が入ってるんやろ？ この毛は毛糸やんか！」とライオンの紛装をはがしにかかってばかりいて、全くライオンごっこに入れない子がいます。前者のこわがりやさんは、昔からいたのですが、後者の“こわがれない子”が、最近目立っているようです。日常の保育の中でも気をつけてみればずいぶん見つかります。ところがこういう子は、ここで示したような夢とイメージの中で遊ぶような保育の中では目立つのですが、字を教えたり、お話の中で質問をしたり、楽器を言われるままに鳴らしたりという教えこみ保育の中では、知ってること、できること、分かることでしか子どもを見ませんので一見優等生でほとんど目立たないのです。その点、こわがりやさんが、どんな時でもウジウジと先生にくっついていて目につくのは対称的です。ところがこのこわがりやさんの心の中には、こわいライオンのイメージが、強烈すぎるほどおそろしく迫っているのに比べ、先の子の心の中には、夢もイメージも感動も（感情も）乏しいのです。こわがりやさんは、安心を得て力強くなってゆく成長の中でのりこえてゆくことができる面が多くあります。しかしこわがれない子は、自然な成長の中で改善されてゆくことが期待されにくいばかりか、夢見る心や感動はますます遠去かり、あれこれ知っていて頭も悪くはないのだが、人の情が分らず、何を考えているのかつかめない青少年といった姿が将来見える気がするのです。しかし全く変化しないのでもないのです。例えばフラフープの輪にたくさんモールをつけて美しく飾り、それを天井からつるしてお星様に目立てて遊ぶという保育をした時、「わあきれいなお星様がたくさんできたね」と保母が言っても、「あれ、フラフープよ」「中にわっかが入ってるんや、お星様じゃないよ」という子はいます。その時、保母が、「あら、宇宙人さんの声がするよ。すてきな星をたくさんありがとう！って、ネ、きこえる？あれ、やっぱりお星様になったんや！」と言うと子どもたちの心に空のイメージが拡がってきて、それに浸ることができてきます。この時どれ程保母が、本気でその気になっているか（ほんとに自分のクラスのかわいい子どもたちが一生懸命つくったあの輪に小さな

宇宙人さんがすわって揺れたら、その下でお昼寝したらどんなにうれしいだろう…と)が別れ道です。ところが、フラフープは運道具入れの戸棚にいつもキッチンと片づいていて、先生しか出してはいけない…と決められているような所では、「あれフラフープよ。私〇回まわせるよ」という子は全く正しくて問題がないように見えるわけです。こわがれない子は、保育により保母によって目立ちもするし目立たなくもなるということです。保母の心の豊かさ次第、その保育のもつ夢とイメージの広さ次第、親が、子どもの能力をではなく、心をどれほど大事にするか次第ということです。ではなぜ、ある保育では目立たない“こわがれない子”が問題なのかをもうすこし考えてみましょう。

#### IV. こわがれない子どもの心の奥に…

ここで、ひとつ思い出すことがあります。このことがヒントになるかもしれない。

私の長女は、先天性心疾患(病名は大動脈管開存症)で、1才2ヶ月の時、手術を受けました。親子そろって約3週間の病院生活をしたわけですが、その手術の数日前、婦長さんから様々な注意事項をうかがった時、こうおっしゃったのです。「手術後はICU(集中治療室)に入りますので、その間(一日から数日あるいはそれ以上)は、親はカメラ越しにしか会えません。ICUから戻った時、お母さんと会っても、まるで知らない人に会ったような感じになることがあります。これはよくあることで、何日かすればもとに戻りますから心配なさないで下さい。」確かにICUから戻って間もない子どもの中に、病室に入って来た人が看護婦さんであろうと母親であろうと見知らぬ人であろうと全く区別ができていないような態度の子どもが何人かいました。逆に、母親にしがみつき、甘えて、少しでも母親の姿が見えないと泣き叫ぶ子もいました。後者は、大手術の体験、そのあとICUで、親から隔離された大きな部屋で24時間煌々と照る電気の下で機械や器具に取り囲まれ、体のあちこちに針や管を通してすごした苦痛の時を考えれば、むしろ当然に思われますが、前者は何かうなずけないチグハグさを感じたのです。このことを退院後、知人の精神科医に話すと、「不安を不安として感じるには、それを支える安定感が要るんでしょうね」と言われました。つまり、「ICU体験は、子どもにとっては恐怖と不安と苦痛以外の何ものでもないのだろう。そして、

不安を不安として、恐怖を恐怖として体験できるためには、そう感じて  
なお自分の存在は揺らがないという基本的な安定感が母親との間に、それ  
までに、つくりあげられていなくてはならないんじゃないだろうか。それが  
あれば「怖かった！」という体験を母親と共有でき、母親に吸収してもら  
うことができるのだが、それがない子どもの場合は、不安や恐怖を感じる  
ことは、とても耐えきれないので、その不安体験そのものを否定してしま  
うのではなかろうか。そして、何事もなかったという無感動の世界に閉じ  
こもることではか ICU 体験から自分を守ることができなかったのではな  
かろうか。そしてその時、不安定な母子関係は、一緒に否定されてしまっ  
たのではなかろうか」ということでした。こわいと感じるためには、心の  
もう一段底で、でも大丈夫という安定感がなくてはならないということ  
です。どんなにおそろしいことが自分にふりかかっても、必ず守ってく  
れる人が自分にはいるのだという絶対的な信頼と安心をもっているという  
ことです。こわがれない子にはそれがありません。つまり、“不安を否定して  
しまう子どもの基底には、母親との共感的なつながりの欠落がある”と考  
えると、こわがれない子どもたちは、単に最近の子どもたちの特徴などと言  
ってられない気がしてくるのです。私たちは小さい頃、怖い話やお化け  
の話を聴くのが好きでした。そのくせ怖くて、兄弟いとかや友達とびつた  
りくっついてきいたり、こたつの中から首だけ出していたり、話をしてい  
る父のひざにのって父のはんてんにもぐりこんで聴いたりしました。そこ  
には暖かなぬくもりがありました。人と人のびつたりとより添った安心感  
がありました。怖い話を一緒に聴いた者同士の連帯感のようなものさえあ  
りました。誰一人「ぼくこの話知ってる。おしまいはこちらなるっちゃ」な  
どと言出す子はいませんでした。最後を知っているくせに、何度もきい  
ているくせに、やはり途中はドキドキして怖くて息をひそめていました。  
そして、いつかは小さな弟たちに自分が話をしてやろうという思いが育っ  
ていました。そんな人と人との連綿つなみのしたつながりが在りました。私たち  
にとって怖い話や怖い紙芝居などは必ず人を通して語られ、その人が同時  
に私たちを守ってくれる力ももっていて、しかも私たちの方もひとりぼ  
ちではないといった状況でした。ところがひとりテレビの前にすすわって  
怖い番組を見る…ということを考えてみると、全く状況が違うのです。そ  
の子どもには暖かいぬくもりも守りも連帯感もないのです。もし不安にな

ったら、（これが本当だとしたら…なんて思ってしまったら）たいへんですから、「これはテレビのつくりごとき。これほんとは人が入っていると」と言いつづけることでしか、安心感が得られないです。テレビが悪いのはありません。今家庭の中で、こたつにみんなが集まって、お母さんのほんてんの下から首だけ出してお父さんの怖い話に耳を傾けるというような密なやりとりが失われてゆきつつあるということなのでしょう。母親は子どもにあれこれ教える前に家庭が、家族が子どもにとっての母なる港となっているかどうかを考えねばならないということを取り返し肝に銘じたい気がします。

こわがれないということは目に見えないものを信じることができないということでもあります。この目に見えないものの中には夢や希望、人の心、やさしさ、思いやり…といったものまで含まれてくることを恐れねばなりません。今の子どもたちの夢は、〇〇が欲しいといった手で触れることができるような夢ばかりで、夢やイメージの中で遊ぶことができません。それは大いに親のせい大人のせいでもあります。近年クリスマス・プレゼントというものは親と一緒にデパートに買いに行くものとなってしまっているようですが、一世代前には、子どもたちの心の中にもっともっとサンタクロースが生きていたし、見たことはなくても、サンタクロースや神さまに、自分が見守られている、分ってもらえているという気持ちも豊かにありました。多くの行事（お正月からはじまって）を、物のやりとりに墮落させてしまい、そこで育まれるべき心を見失わせてしまったのは親（大人）たちだと思います。多くの保育も、行事は何かをすること（父の日には父の顔をかき等々）となってしまっていて、一人一人の保母が、その行事を通じて育てるべき子どもの心が何であるのかを考えなくなってしまっているようです。その中で育つ子どもは“目に見えないものの中にとっても大切なものがある”という人間にとって最も重要なことを育まれずに大きくなります。そして、こわがれない、夢のない、自発性のない子どもになってゆくようです。また、保育園でのお話も、基本的には先に述べたいろり端の再現であってほしいものだと思います。

こわがれない子どもたちは孤独なのです。不安に立ち向かうに足る共感や同行者を得られないのです。夢の中に想像の旅をすることも一人では不安が先立ってしまいます。何か新しいことに挑むにも、心の支えがなくて

は不安に打ち負かされてしまいます。親・保育者はせめて、子どもが怖い  
思いをした時、安心して“怖い！”と思えるくらいは、守ってやってほし  
いものです。“弱虫”と叱らず、“こんなものづくりもの！”と教えこまず、  
怖さに共感して、そこから立ち上がる勇気を共にふるいおこして歩きだす  
道の同行者になってほしいのです。こわがれない子、彼らは親や保育者に  
共感者・同行者となることの重要性を訴えているように思えます。

(昭和61年、クリスマス・イブに脱稿)